＜調査研究シリーズ 114＞

日本語教科書における大衆文化の表象と日米ポストコロニアルの再生産

松　島　　綾

序　章

「言語は文化の窓だ」という表現は説明するまでもなく，多くの人が瞬時に「窓」が指し示す含意を読み取ることができる。言語は文化であり，言語と文化は相即不離の関係にあることは一般的知識としてのみならず，レヴィ＝ストロースをはじめ人類学から心理学，文学，社会学，コミュニケーション学に至るまで様々な分野で研究が行われ，言語習得と文化理解の関係が詳細に論じられてきた。このように周知の事実が未だに研究者の注目を集め論じられること自体を見ても，言語と文化の関係の複雑性が読み取れる。更にそれぞれが流動的であり，その流動性がグローバル化により加速，拡大することにより，その複雑性が国境や人種など「目に見える」境界と同一視できないハイブリッドな特徴を帯びつつも，ナショナルな文化などの特徴を維持する動きも多くの研究が示している。

このように言語教育と文化理解の関係は複雑で，様々な研究がなされてきたが，教科書がナショナルな文化を構築するプロセスを分析したものは多くない。教科書が提示するジェンダー・ロールや人種間の差におけるテクスト分析は数多く見られ，男性と女性の表象分析では男性と女性の職業の差異が男性優位社会におけるジェンダー・ロールを肯定しているという分析結果が出ており（Sunderland et al., Durrani），人種間においても白人優位的表象が見られるという研究が数多くある（Shuck, Yang）。しかしながら，教科書がその言語が使用されている国の文化をどう表象しているかという研究は限られている。

理由の一つとして，文化と国という境界を安易に結びつける危険性が挙げられる。先ほども述べた通り，グローバル化の影響によるハイブリッド化はもちろんだが，「国＝文化」という単一的図式を作り上げてしまうことにより，国もしくは文化内の多様性を軽視してしまう恐れと，その図式が排除してしまうものが出てくるからだ。例えば，多様性の軽視においては地域的差異や，性別，セクシュアリティーなどによる差異が抑圧され，国家単位の文化が基準とされる図式が構築されることにより，そ

の「基準」となりうる特徴を持つ集団の文化が優位に立つ。また，排除においては国家単位の表象さえからも除外される人々，日本というコンテクストにおいては在日韓国・朝鮮人，在日中国人などが挙げられる。このように「国＝文化＝言語」という図式が孕む暴力性と危険性のため教科書が表象する文化を「国家」という視点から分析するのは非常に困難であるが，「国家単位の文化がある」ということを前提にするのではなく，「教科書がどのように国家単位の文化を構築しているのか」という問いを立て分析することは，教科書が学習者に画一的文化を伝達しているという注意を換気するという意味でも重要である。

この論文はアメリカで使われている日本語教科書を分析することにより，それらがどのように日本文化を構築しているのかを明らかにすることを目的とする。特に教科書における表象が日本の地域性やアニメ，まんがなどの物質文化などを採用し多様性に触れつつもナショナルな文化を構築している過程を明確にする。従って，この論文は教科書をアメリカにおける様々な日本の大衆文化表象の一側面として捉え分析する。

その理由として，現代のグローバル化社会において言語学習者が言語教育以外である国の文化に触れる機会は有り余るほどあるが，大学などの教育機関における言語教育が持つ信憑性は拭えない。つまり，学問分野としての確立がその文化表象に与える確実性はアニメや映画などのサブカルチャー的文化より正当的な文化表象と捉えられがちであることは否めない。また，言語教育が抱える問題として文化の画一化の回避が論じられているように（Crozet and Liddicoat，Simpson，鈴木，Yuen），社会的規範と文化，言語運用の密接な関係をどのように画一化を回避しつつ教授するかといった難しさも存在する。言語教育がいわゆる「標準語」を基本としていることからも文化について触れる以前に言語レベルでの画一化が起こっていると言っても過言ではない。従って，言語教育によりどのような文化的理解が促されているのかを把握することはクリティカルな視点からの文化研究を進める上でも必要と思われる。

もう一つの理由として，ポップ・カルチャーから言語に興味を持ち修学に至るケースが増えていることがあげられる。日本経済が成長し就職やビジネス利用を目的に日本語を学んだ学生が多かった1980年代に比べ，現在はアニメやまんがに対する興味・関心から日本語を学ぶ学生が大半を占めている。現に『ワシントン・ポスト』は2014年の外国語習得に関する記事に日本語はビジネス目的ではなく文化を楽しむために学ぶものだと言じ，『アントレプレナー』では最高経営責任者が知っておくべき6つの言語が示されているが，それに日本語は含まれていない。経済と言語というむしろ国家レベルでの結びつきと比べ，ポップ・カルチャーと言語というローカルな結びつきが強い今日の日本語教育において，その影響は教科書にも表れており，文化ノートなどの文化的背景の説明で頻繁に取り上げられている。

この論文ではアメリカの高等教育機関で広く使用されている日本語の教科書2点

に焦点を絞り，その教科書が大衆文化やポピュラー・カルチャーを用い構築する日本文化観を分析する。分析にあたり，テクストによる表象のみでなく，登場人物，写真，絵教材も含め視覚的表象にも焦点を当て，テクストと映像の関係性にも言及する。分析対象とする教科書は『げんき』と『なかま』で，これらは日本語教育の初級及び初中級レベルで使用される。初級，初中級用の教科書は上中級，上級レベルの教科書より文化的内容に触れる度合が少ないが，そのような教科書にも日本文化を構築する要素は十分に見られる。更に，日本研究を専攻しない限り学習者の外国語履修は 2 年で終了することから，クリティカルな文化分析に触れることなく，教科書が提示する日本文化に触れ終学する学生の数はそうでない学生の数を遥かに上回る。従って，2 年間の就学時にどのような文化観が学習者に提示されるのかを考察することがこの論文の目的である。

先行研究

言語教育において教科書の政治性は数多く分析されてきた。教育学はもちろんのこと，社会学，外国語教育法，言語学など，様々な分野で分析がなされていることからも教科書が学習者に与える影響の大きさが見て取れる。英語で出版された研究にはジェンダーや人種の表象を分析したものが多く，スペイン語からロシア語，英語の教科書に至るまで，多くの言語教育で使用される教科書が分析対象となっている。ジェンダーの表象においては男女間での差が解明され，教科書に登場する男性は会社員や医者，弁護士，大学教員といった社会的地位を与えられているのに対し，女性は主婦や学生，看護師といった家庭的もしくは補助的地位にとどまっていることが指摘されている。また，話し方や発言の量にも男女差が見られ，男性優位に会話が進んでいることが指摘されている。[1)]

ナショナリズムの観点からの分析も多くみられ[2)]，中でも Gulliver はカナダで使用される ESL の教科書が国旗や地図，国家的記号，日常生活における習慣を用いて構築する凡庸なナショナリズムを分析し，画一的なカナダのイメージの再生産を避けるよう喚起している。

言語教育と密接な関係があると言われている文化的側面も多くの研究がなされてい

1）主な研究として前述した Sunderland et al.，Durrani 以外に Foroutan，Jones and Kitetu，Khurshid et al.，Lee and Collins，Poulou，Rifkin があげられる。詳しくは参考文献を参照。

2）この分野の研究では Azimova and Johnston，Durrani，Ramirez and Hall，Shardakova and Pavlenko，Simpson の分析などがある。また，Shuck は教科書で表象されている非英語話者がステレオタイプを用いた描かれ方をしていると批判し，Yang は英語教科書に表象されている非英語圏文化のステレオタイプ化を批判している。

る。上述のジェンダーやナショナリズムもその文化的側面であるが，ここでいう文化的側面とは教科書の分析ではなく教授法との関係における文化的特徴の伝達のことを指し，指導教員が教科書の画一的文化表象を踏まえた上でどのように教授すべきかといった議論が展開されている（Kubota, Liddicoat）。特に当該言語が使用される国における文化的多様性の伝達の重要性が多くの研究に見られ，指導教員の教科書依存型教授法が指摘されている。また，この分野では学習者を画一的に捉えることの危険性も指摘され，就学言語が使用される国と学習者を二項対立で捉えることにより構築される文化本質主義を避け，学習者の多様性や文化の流動性を取り入れた教授法の導入が求められている。

日本語教科書，教授法に関する研究にも上記の研究は見られ，多くの研究者が現在使用されている日本語教科書でステレオタイプ化された性別に基づいた話し方が多く使われていることを指摘している。中でもSiegal and Okamotoは社会言語学の研究に基づき性別による話し方は個人や状況により変化することを指摘し，画一化された教科書上の表記を批判している。そして画一化を避けるために指導教員が教科書以外の教材を使用することの利点に言及している。ナショナリズムにおいてはTaiが植民地主義の持続的余波により植民地主義的権力関係の再構築に言及しており，画一化された標準語としての日本語と日本文化を用いた教授法を批判している。更にTaiはそのような日本語教育が日本の植民地政策においてイデオロギー的役割を果たした「国語」と戦後アメリカとの二項対立により作り上げられた日本文化を独特のものとする「日本人論」を画一化の土台としていることを指摘し，それぞれが近代以降に作り上げられた概念であると言及することにより，日本語と日本文化の普遍性が神話化されたものであると明らかにしている。

文化的側面では多くの研究がやはり教授法との関係について言及している。先に述べたTaiの論文もそうであるが，Li and Umemotoをはじめ，Matsumoto and Okamoto, Otsuji and Thomson, Kubotaなどが日本語教育と日本文化表象の関係について分析し，教授法において教科書に記載された日本文化をクリティカルに検討することなく文化的側面を教示してしまう画一化を指摘するとともに教員が方言や性別，世代，国籍などによる文化的多様性を組み込んだ教授法を取り入れる必要性を訴えている。

教科書が多様性を欠いた画一的日本像を生み出しているのなら，その画一性に依存せず教授法で多様性を生み出すことにより，教科書が表象する日本を「一側面」と捉えることは可能である。しかし，それが教科書の信憑性を浸食したことになるのであろうか。イが『「国語」という思想』で述べているように，教育として制度化された「国語」が言語と同時に日本文化の画一化を進め，と同時に，日本人が学ぶ「国語」と外国人が学ぶ「日本語」という二項対立も構築され，排除と包摂のメカニズムが誕生したことは明らかである。更に小熊が述べるように，この排除と包括のメカニズム

は日本の植民地政策に大きく貢献し，皇民化政策の重要な役割も果たした。

ここで重要な問いは「果たして私たちは日本語の教科書が表象する日本人と日本文化を厳密に理解しているのだろうか」「その表象がどのように日本とアメリカの二項対立を構築し，日米の植民地主義的権力関係を維持しているのか」という問いである。これらの問いは，上に述べた教授法が果たす役割を否定しているのではなく，教授法が指導案や試験を含め依るであろう教科書の分析をすることで批判的視点を導入した教授法を促すことを目的とする。また，現在の日本語学習者は様々なメディアを通して既に多様な日本語に触れていることからも教科書のみが学習者の日本人・日本文化理解の手段とは言えない。にもかかわらず，日本人・日本文化を画一的に捉える動きが減少していると言えないことも事実である。従って，日本語教科書が表象する教育として制度化された日本のポピュラー・カルチャーの分析を試みることことにより，画一化のメカニズムの可視化を試みる。ここでいうポピュラー・カルチャーとはメディア媒体の映画，音楽，テレビ番組などのみではなく，日常生活全般における広範囲で捉えたもので，教科書が構築する日本文化の特徴を分析する。以下の分析ではまず教科書が描く日本人・日本文化を分析し，次にそれらが示唆する「他者」が誰なのかを明らかにする。そして，最後に日本人・日本文化が誰の視点により構築されているのかを論じていく。

分　析

1. 伝統と伝統の場の構築

日本における日常生活全般に関する文化的記述は今日の言語教育で使用される教科書に欠かせないものとなってきている。日本の英語教育で使用される教科書でも大学の時間割やクラブ活動，旅行，友人宅への訪問に至るまで，学生が海外に行った際に体験するであろう場面とそこでの会話が想定されている。また，会話のみでは説明ができない文化的記述も「文化ノート」や「カルチャー」といったセクションを設けて詳しく説明がされている。つまり，学生が教科書を通して外国生活を学び，実生活の疑似体験を教室で行えるような作りになっている。従って，教科書はその疑似体験を生み出し，学習者の文化理解を促す一要因であると言えるが，残念なことに文化表象が二項対立により構築された画一的なものであることが多い。

日本語の教科書も例外ではない。『げんき』『なかま』双方とも上記の特徴が見られる。教科書の構成に至っては双方とも「会話」で各章の重要事項を紹介したのちに当該文法と表現の説明や練習に移る。その後，漢字を紹介し，「読み物」に入る。文化的背景を英語で説明している「Culture Note」は『げんき』は第二版から教員らの要望によって導入し，『なかま』は「日本の文化」を第一版から取り入れている。『なか

ま』は各章の最後にさらに「聞き上手話し上手」という項目を設け，コミュニケーションに関連した事項を紹介している。

このような構成からなる教科書が構築する日本人，日本文化とはどのようなものであろうか。先ず結論から述べるとどちらの教科書もいわゆる「日本人論」[3]に表象される日本人，日本文化の領域を脱しきれていない。会話や文法説明の際の例文，練習に使用される語彙には「すし」「てんぷら」「お寺」「神社」「京都」「着物」「畳」「ふすま」といった言葉が双方に使用され，『なかま』ではその他に「過労」，『げんき』では「歌舞伎」や「ゴジラ」「やくざ」「ハローキティ」も登場する。また，日本のポピュラー・カルチャーの代表とされるアニメやまんがの導入も見られ，『なかま』は各章冒頭の会話導入の際に会話に沿ってまんがのコマを順番に並べる練習を取り入れており，『げんき』は『ワンピース』が練習に『ドラえもん』が読み物に加えられている。これらの言葉はどれも「日本の◯◯といえば」という常套句の答えとなっている。例えば「日本の食べ物といえばすし，てんぷら」「日本の伝統文化といえば着物，歌舞伎」といったように外国人が既知の日本文化が挙げられている。さらにそれぞれの「Culture Note」「日本の文化」の項目には「日本の祭り」「挨拶とお辞儀」「日本の家屋」「旅館と民宿」などが説明してあり，日本特有のものとしての記述が多く見られる。これらの事項は前述の語彙との関連において画一的な日本文化像を生産していると言える。例えば，「日本の祭り」は「着物」や「神社」などが相即不離の関係におかれ，祭りには着物を着て神社に行く習慣が語られており，「日本の家屋」は「たたみ」「ふすま」といった内装と密接に結びつき，日本の家のイメージが均一化されている。

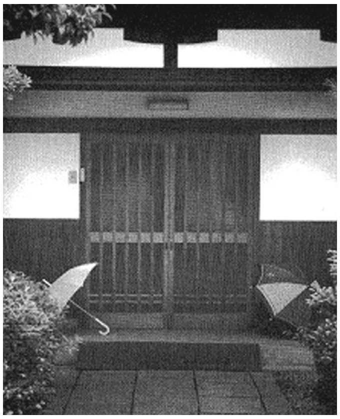
もちろんこれらの伝統的なイメージが日本全体のイメージであると学習者が鵜呑みにするケースは少ない。メディアによる情報のグローバル化により高層ビル群が立ち並ぶ日本，祭りではなく日常生活において日本人がどのような服を着，どんなところに行っているのかということは学習者は既知である。がしかし，伝統的イメージをあえて紹介することで作り出される差異の存在も軽視できない。つまり，日本を知るということは他文化の影響がない伝統文化に触れることであるという宣言と捉えること

---

3) ここでいう「日本人論」は第二次世界大戦後に形成された日本人の特徴を示したものである。基礎となったのは文化人類学者のルース・ベネディクトの『菊と刀』であり，「西洋対日本」という二項対立により生み出された集団主義的価値観を日本文化の本質として捉えたものである。日本の経済発展とともに終身雇用や年功序列のような日本的経営の特徴を語る論調も多く見られるようになり，集団主義における「和」を重んじ態度からコミュニケーション形態も直接的なものよりも暗黙の了解に基づいた非直接的なものであるとする研究も盛んに行われた。エドワード・T・ホールの『沈黙の言葉』を基盤とし，初期の異文化コミュニケーション学も彼の「アメリカ対日本」の図式に沿って日本の文化的特徴を日米双方の学者が行ってきたが，80年代90年代に入り，酒井直樹やハリー・ハルトゥニアン，レトリックなどのコミュニケーション学に影響を受け，二項対立の政治性を捉えた上でのコミュニケーション研究が行われるようになった。

ができる。そしてこの他文化の影響が欧米に限られていることは両教科書の文化記述において明確である。例えば，挨拶の際に欧米のように握手はせずお辞儀をすることを日本人が好むや日本のトイレは大半が洋式になってきたがまだ和式のトイレが数多く存在するといった「欧米対日本」の図式に基づいた説明文がそうである。従って学習者は日本に行った際に欧米化された生活スタイルに温存された伝統的日本文化を「探す」使命感を植えつけられるのである。

さらに『なかま』の第 1 版に至っては各章のはじめに下にあるような伝統的日本文化の写真が学習内容とともに記載されるといった形態をとっており，言葉のみでなく映像による日本文化の表象も見られる。「天気と気候」という表題の第 1 章では日本式家屋と見られる家の玄関が正面から捉えられ，木枠で作られた引き戸を中心に脇には傘と植木が左右対称に捉えられている。この写真から天気を想像させるものは左右対称に置かれた傘のみで，それ以外は天気や気候とは全く関係ないものとなっている。天気を表す傘自体も写真の下方の脇に置かれており，見る者の視点の中心にはないことから，課の主題を語るような地位を与えられていないといえる。あくまで中心は日本家屋である。また，「私の将来，じゅんび」という表題がつけられた第 5 課では愛知県立女子短期大学の卒業式の様子が添えてあり，壇上で卒業証書を受け取っている袴姿の女子大生が，その前方にはこれから証書を受け取るために列をなした学生たちが並んでいる姿が捉えられている。写真内の女子学生のほとんどが袴姿であることから，大学の卒業式は袴で臨むという印象を与える。



『なかま 2』第 1 版：左から第 1 課の表題に添えられた日本家屋の写真，第五課の表題に添えられた卒業式の写真

このような表題の写真は第 2 版になり教科書自体が大幅に改定されるとともに削除されているが，第二版でも他の課で類似した表象が見られる。例えば『なかま 1』の第 5 課では「日本のうち」という表題に下のような近代的ダイニングキッチンの

写真が添えられているが，同課の「日本の文化」では引き戸の玄関やちゃぶ台と座布団が置いてある畳部屋が紹介されている。また，『なかま 2』の第 7 課では「料理」という表題に手巻き寿司の写真が添えられ，同課では手巻き寿司の作り方が紹介され，第 9 課では「文化と習慣」という表題とともに寄席の写真が添えられている。

『なかま 1』第 2 版第 5 課：左から表題に添えられた近代的日本家屋のダイニングキッチン，同課の「日本の文化」に添えられた引き戸玄関と畳部屋

さらに，大幅な改定にも関わらず「日本の文化」における伝統的な日本の表象は変わっていない。羽織袴と白無垢の結婚式の写真や，年中行事の詳細な紹介は依然としてあり，儀礼的場における伝統文化の存続が明示されている。従って Ivy が旧国鉄の「ディスカバー・ジャパン」キャンペーンを分析し，消滅していくものを温存するのではなく，消滅していくと思われているものの可視化を指摘したように，温存されている伝統文化の領域が形成されていると言える。

このような使命感と領域の構築は「京都に行く」「お寺に行く」といった表現が例文や練習に頻出することからも明らかである。『げんき I』の第 3 課の会話で留学生のメアリーと日本人大学生のたけしが初めてのデートの約束をし，京都に映画を見に行こうと決める。京都周辺に二人が住んでいるのかと思えば，その後のメアリーとホストマザーとの会話でメアリーが早起きしてデートに出かけていることからも，京都まである程度の時間がかかるところに住んでいるのがわかる。映画であれば京都でなくてもいいのであろうが，その理由は第 4 課の会話で明らかになる。待ち合わせの時間が過ぎてもたけしが来なかったので，メアリーは代わりに一人でお寺に行って写真を撮ったというのだ。メアリーは本屋やデパートにも一人で行っているが，その中に当然のようにお寺が入っていることは前述の伝統文化の発見との関連から予測可能である。

そして，伝統文化の探訪の手段として両教科書で紹介されているのが旅行である。『なかま 2』第 1 版の「旅行」という表題の第 2 課の表紙には鎌倉の仏像の写真が用いられ，日本語学習者の旅行が伝統文化に触れる旅であるという前提が見られる。会

話では北海道旅行について留学生のアリスとリーが話しており，アリスがリーに雪まつりについて説明する内容のものとなっている。また，同課の「日本の文化」では駅弁や旅館が紹介され，旅館の写真も添えられている。右斜め正面から捉えられた旅館は「天気と気候」の表紙に用いられた日本家屋の正面写真と似ていて，画一化された伝統が見て取れる。『げんき 2』では，旅行が「沖縄旅行」と「長野旅行」という表題がついた二つの課で取り上げられている。長野旅行では長野出身のみちこに誘われ，たけしとメアリーが長野で善光寺と東山魁夷の絵，そばを楽しむ。このように両教科書とも外国人の多くが日本の伝統文化と結びつける京都以外の場所を旅行の目的地としてあげているにもかかわらず，登場人物が旅行で経験するのは伝統文化とされる文化に限られている。つまり，これらの旅行の課は Creighton が日本の旅行産業を分析し，地方が伝統と郷愁を消費可能な「商品」として創造されていると指摘したように，伝統文化が日本の一地域に限られたものではなく，日本中にあり即座に触れられる場所にあるということを示す役割を果たしている。

では，沖縄旅行はどうか。ここではイギリスからの留学生ロバートと日本人大学生のけんが沖縄旅行に行きサーフィンを楽しむ設定になっており，伝統文化と言われているものは一切出てこない。沖縄に関する記述は第 15 課の読み物にも出てくるが，ここでも海とビーチ，ダイビングといったリゾート地としての沖縄のイメージばかりである。このような沖縄の表象は同じ課の読み物にある広島と宮島，京都，新宿の説明と対比すると問題が明らかになってくる。先ず，沖縄と京都は美しいイメージのみが語られているのに対し，広島と宮島，新宿は宮島神社と新宿の繁華街の賑やかさに加え，戦争のイメージも織り込まれている。広島といえば原爆ドームというようにイデオグラフ[4)]として機能する広島が指し示す原爆は我々日本人の中にも存在する。しかし，新宿と戦争というイメージは想像しがたい。にもかかわらず，「新宿駅西口の地下広場では（中略）戦争で手や足をなくした人が通る人にお金をもらっていました。」（293）という記述がある。つまり，新宿の説明に戦争の負の遺産が取り上げられているにもかかわらず，沖縄の二度にわたる描写で一度も戦争に触れられていないのである。広島が宮島の美しいイメージと共に記載可能ならば，沖縄も美しいイメージと戦争を同時に取り上げることが可能ではなかったのだろうか。この問いに答えるために美しいイメージのみで描かれている京都と沖縄の固定化のレトリックを詳しく見てみる必要がある。

先ず，京都だが，先に述べたように両教科書に散在することから，日本伝統文化の

4）イデオグラフとは Michael McGee が提唱した言葉である。社会的・文化的価値を内包した言葉を指す言葉で，例えば「広島」といえば「原爆」と，立証や証明，説明をしなくとも共通理解が可能な言葉である。

中心として捉えられていることがわかる。その伝統文化を登場人物たちは京都のみでなく他の地域にも存在することを旅行を通して確認する。伝統文化が日本家屋や旅館，着物などで画一的に表象されることからも，伝統文化の場の中心として描かれている京都に相反するイメージが与えられていないのは，この画一化からも明らかである。

では，沖縄の描写はどうか。沖縄の描写からは伝統文化は一切見られない。それどころか世界各地に見られるリゾート地の特徴が詰め込まれたものとなっている。沖縄を観光地として組み込むことにより，地理的な日本としての表象は行っているが，沖縄が抱える戦中や戦後の基地問題を排除することにより，日本における多様性を抑圧した画一的な日本のイメージが作り上げられていると言える。このことは両教科書が一貫して表象する「日本人は」という言葉で始まる説明文にも多様性が見られないことと一致する。つまり，日本人の単一性が当然のごとく想定されており，多様性を抑圧することにより戦争の悲惨な経験と死守されている伝統文化を日本，日本文化として構築していると言える。

2．日本人の性質の画一化

伝統文化のみでなく日本人の一般的性質も画一的に描写されており，円滑なコミュニケーションのための秘訣として紹介されている。前項で触れた挨拶に関する説明では，日本人が握手を好まないこと，初対面の時の名刺が果たす役割，お辞儀の角度とそれらが示す丁重さや社会的地位の相違が事細かに述べられている。日本文化としての挨拶の説明は，『げんき 1』は序章，『なかま 1』は第二課と，どちらの教科書も基本的挨拶表現を学習する早い段階で写真やイラストと共に導入していることから，学習者が早い段階から日本人のコミュニケーションに組み込まれている丁重さや社会的地位，年功序列の重要性を認識しておくことが期待されていることがわかる。

このような日本社会の特徴は一貫して両教科書に現れており，相手を呼ぶ時に苗字を使うのか名前を使うのか，誘いや提案の断り方や敬語の使い方を説明する際などに顕著に現れている。『なかま 2』は第四課の読み物で日本人にはプライバシーという考えがなく，プライベートな質問をよくすると説明している。その理由として日本人が「一人一人よりグループを大切にしてきた」（225）ことをあげている。第五課では日本の企業における終身雇用制度や年功序列システムを紹介し，このようなシステムが減少はしているが変化は遅いということを述べている。これらの企業システムは戦後日本経済の発展とともに有形化した「日本人論」が日本の集団社会の特徴として描写した特徴と等しい。また，贈り物についても遠慮や謙遜をすることが一般的だと説明し，「つまらないものですが」や「ほんの気持ちですから」，「そんなお気を使わないでください」などの表現を知っておく必要があると述べられている。これらの特徴は敬語を取り上げている第八課にも当然のごとく取り上げられ，就職活動で日本語が

上手だと褒められた際に「いいえ，まだまだです」と謙遜の言葉で答えることが指導されている。つまり，『なかま』は一貫して日本人論に寄り添った日本人の特徴を記載しており，たとえ終身雇用制度のように変化をしつつあるものも変化の程度が顕著でないことを述べることにより，日本人論により表象された日本人像が損なわれずに残っていることを強調していると言える。

『げんき』も日本人の描写が日本人論の域を出ることがない。「いいえ」のような直接的な表現で断らないこと (94)，サラリーマンになったたけしが忙しくてメアリーに会う時間がないことについて「僕だったら，仕事より彼女を選ぶけど」とたけしの会社重視を示唆するセリフを登場人物に言わせている。これを言っているのは日本人大学生のけんで，この発言は一見会社というグループよりも個人の事情を彼が優先しているように見えるが，彼の「やっぱりサラリーマンは大変だな」という言葉からもわかるように，日本企業の態勢について知識があることがわかる。従って，ここでは大学生と社会人が対照的に描かれており，以前はメアリーとの時間を楽しんでいたたけしが社会人となり会社を優先せざるおえなくなったように，いずれけんも会社を優先するようになるという想像が可能となる。

遠慮と謙遜の文化も日本文化の特徴として『げんき』で紹介されている。第 19 課の「Culture Note」では友人や知人宅の訪問の仕方として 決まり文句一式が挙げられており，贈り物やお土産を渡す際には「これ，気に入っていただけるといいんですが」，お茶を出された際には「どうぞ，おかまいなく。すぐ失礼しますから」といった表現が見られる。特に謙遜や遠慮という言葉を用いて説明が加えられてはいないが，状況説明以外に全く説明がないことから，これらは普遍性を持った決まり文句であり，同課では敬語が重要文法事項に挙げられていること，そして次の課の最初の文法項目が謙譲語でその説明として，丁重さが必要とされる関係では自己の行為を謙虚さを表す言葉を用いて表現することがイタリック体を用いて強調した形で記述されていることから，『なかま』と同様に日本人論に沿った日本人像が維持されていると言える。

3．日本人の他者は誰なのか

それでは両教科書に見られる日本人像が想定する他者は存在するのであろうか。吉野耕作が指摘しているように日本人論はアメリカとの比較により構築された。そして，馬渕仁はその日本人像が今でも広く日本人から支持され，文部科学省が掲げる英語教育を通した異文化理解の「異文化」という概念にまでアメリカと日本の二項対立が浸透していることを明示し，異文化の脱構築を測っている。また，酒井直樹やハリー・ハルトゥニアンは日本人論が日米のコロニアルな関係を維持する働きを持っていると指摘し，日本人論が作り出す日本人像は唯一無二の文化的特徴を持った人々ではなく，アメリカの普遍性を肯定するための特異性を保持したものであると言及している。両

教科書がアメリカとの二項対立により構築された日本人論を用いて日本語やコミュニケーション形態を説明していることから，アメリカが他者であると即座に結論づけることもできよう。しかし，馬渕が指摘しているように，持続的アメリカとの対比が日本人論に基づいた日本人観の非批判的継続であり，酒井やハルトゥニアンが指摘する日米のポストコロニアルな関係の維持につながっているのである。従って，両教科書が日本人論を再構築をするプロセスを分析することが重要であり，両教科書がアメリカを日本の他者として位置付けていくレトリックを以下で考察する。

先ずここで断っておかねばならないのは『なかま』と『げんき』はどちらも主にアメリカやカナダ，ヨーロッパで採用されている教科書であり，著者は日本とアメリカの大学で教鞭をとっている教員であるということだ。しかしながら，これらがアメリカと日本との二項対立に必然性を与えるものであるとは決して言えない。日本においてもアメリカにおいても大学での日本語学習者は西洋人，特にアメリカ人に限られたことではなく，多くの韓国人，中国人も学んでいる。グローバル化が謳われ，企業の人材のみならず学生の行き来が盛んになっている現代において，学習者がアメリカ人であると想定することが間違っているのは，日本語教育を経験せずとも想像するに難しくない。ましてや日本語学習者がアメリカ人であると思い描くこと自体，酒井とハルトゥニアンの批判するポストコロニアルな関係の中から脱せていないといえよう。従って アメリカ人を主な学習者と想定すること自体が日本とアメリカを二項対立関係においた日本人論が浸透していると踏まえ，その構造を明らかにしていく。

『なかま』も『げんき』もアメリカからの女子留学生が主人公となり会話が進んでいる。『なかま』はアリス・うえだという日系アメリカ人で，『げんき』はメアリー・ハートというアメリカ人である。アリスの専攻は最初は文学と記載があり，のちに日本語とも記載がある。メアリーの専攻は一貫して日本語である。学習者は主人公の日本での生活を追っていきながら語彙，表現，文法のみでなく，前述した日本文化や日本でのコミュニケーションスタイルを学ぶ。どちらの教科書も最初に国の名前を必須語彙として紹介しており，『なかま』はアメリカ，イギリス，オーストラリア，カナダ，韓国，中国，スペイン，フランス，メキシコ，『げんき』はアメリカ，イギリス，オーストラリア，韓国，スエーデン，中国をあげている。南米やアフリカ，東南アジアの国々が欠けているが，欧米のみでなく日本に近い韓国や中国をあげていることからも，ここではアメリカとの二項対立とは言えない。

しかし，学習が進むにつれてアメリカとの二項対立が顕著になってくる。『なかま1』ではあいづちについての説明をする際に，アメリカのビジネスマンが日本の会社との交渉の際，日本人のあいづちを契約がうまくいっていると理解したが，結果契約はうまくいかなかったという典型的な例をあげている。そして，日本人があいづちをした理由として，相手の話を聞くときの沈黙が話題への無関心，失礼または冷淡な態

度と捉えられるからだとしている (67)。ここで構築されたあいづちの二項対立は一過的にも捉えられるが，各課の最後に導入された総合練習でも再三あいづちをするように注意が促されている。例えば『なかま 1』の第 5 課では実用的な表現として再び紹介されている。このような反復からも重要性が高いことが明らかであるが，誰に対しての反復であろうか。もちろん，あいづちをあまりしない文化を持つと想定されている学習者である。そして，あいづちの説明の際に日本とアメリカの対比を用いていることから，この注意の反復はアメリカ人に向けられているということが可能である。

この他にも日本とアメリカの二項対立は頻出し，『なかま 2』の第 4 課の読み物で触れられているプライバシーや近所付き合いの問題に関して説明している「日本の文化」でもアメリカでは問題にならないことが日本では問題になることがあると記述されている。また，日本人の旅行先として『なかま 2』第 2 課の読み物ではハワイが，聞き取りの練習では西洋の町が 5 つ挙げられ，そのうちの 2 つはアメリカの都市である。さらに同課のロールプレイでは日本人の友人がアメリカに行くときのアドバイスをするように指示していることから，アメリカ旅行のアドバイスはできて当たり前ということが示唆されている。香港への旅もここでは挙げられているが，このように日本以外のアジアの国々に登場人物が旅行をするという設定はアメリカをはじめとする欧米の国々に比べると教科書を通してほとんどない。唯一見られるアジアの旅行先は中国と台湾だが，どちらも登場人物の出身地で帰国するという設定で取り上げられており，日本人，または留学生が訪れるというものではない。

最後に『なかま 2』第 8 課の就職相談を取り上げた課では読み物に求人広告と履歴書が用いられており，求人広告には「バイリンガル優遇」と記載されている。では，どの言語のバイリンガルであるのか。続く 2 つの履歴書がアメリカの大学を卒業し，JET プログラムを通して日本で働いた経験があるアメリカ人と日本人の 2 通であること，日本人は留学経験はないが 英語検定一級に合格したと記載していることから，英語と日本語のバイリンガルであることがわかる。これは馬渕が言う，英語教育における異文化が指し示すアメリカと共通しており，英語が使用されている国はアメリカのみではないにもかかわらず，英語といえばアメリカ，英語教育といえばアメリカ文化に精通した異文化理解という考え方に沿ったものになっている。従って日本人論が構築された仕組みの域に留まった日本とアメリカの表象であると言える。

『げんき』は「Culture Note」に日米対比を用いた記述があまり見られない。しかし「日本では」「日本人は」という言葉が用いられているように多様性を考慮していないことは明確である。では，その日本，日本人はどう構築されているのか。先ず，ウィーンへの旅行，アメリカ，オーストラリア留学など，欧米諸国が日本人の目的地として取り上げられている。また，読み物でも様々な国の留学生の視点から見た日本が取り上げられているが，欧米からの留学生が 3 分の 2 を占めている。さらに留学

生が見た日本の描写を詳しく見ていくとほとんどの留学生が日本によい印象を持っていることが分かる。例えばイギリスからの留学生ロバートは沖縄の海の美しさを手紙に書き，ロンドンから留学したジェイソンはホスト・ファミリーに日本でお世話になったことに対するお礼の手紙を書き，韓国からの留学生スーはメアリーのホスト・ファミリーを訪問して料理が美味しかったこと，着物をもらったことを語っている。あまり良くないイメージを持っているのはメキシコから留学しているエバと国籍は明確にされていないがウデイ・クマールという留学生で，エバは友達がなかなかできないと言い，ウデイは日本のサラリーマンにアンケートを実施し働き過ぎだと結論付けている。

このように欧米からの留学生が見た日本が多数を占めるが，教科書の練習や例文，ロールプレイの設定と関連して見てみると，『げんき』もアメリカを日本の他者と位置付けているのは明らかである。まず，日本と比較する形で出てくる国がアメリカだけだということである。例えば第 17 課のまとめの練習では「あなたの国と日本でしてはいけないこととしなくてはいけないことを話しなさい」という練習の例としてアメリカと日本の習慣の違いが挙げられており，第 19 課の読み物ではカリフォルニア大学に通う学生が日米関係を勉強していると書かれている。そのほかにも第 22 課の会話ではメアリーとたけしが日本の教育制度について話しており，メアリーが日本で子供を育てるのは大変そうだと言っていることから，アメリカではそうではないという推測が可能となる。

最も顕著に日米関係が現れるのはこのメアリーとたけしの関係であると言える。二人は第 1 課で出会ってから，徐々にお互いを知り付き合うようになる。二人はデートで歌舞伎を見に行ったり，長野に行き東山魁夷の作品を見に行ったりする。このような二人の関係はメアリーがバレンタインデーに手編みのセーターをたけしにプレゼントすることからジェンダー・ロール的に見るとたけしが優位に位置付けられているように見えるが，そうではない。たけしはデートの待ち合わせ場所を間違えてメアリーに怒られ，たけしが作った料理を食べてメアリーがお腹を壊したと不平を言い，ダンスに行ってメアリーがたけしの踊りを盆踊りみたいだと言って笑うのである。アメリカと日本，メアリーとたけし，女性のメアリーと男性のたけしといった関係は一見たけしが有利な立場を与えられていると考えがちだが，二人の会話を見ていくと上記で述べたように優位に立っているのはメアリーである。つまりジェンダー・ロール的に見た関係よりも国家間の力関係の方が優先されていると言え，二人の関係が表象する日本がアメリカを優位に置いた日本であり，それはメアリーが持つアメリカの視点を中心とした日本像であると言える。

結　論

この論文では日本語教育で使用されている教科書『なかま』と『げんき』の分析を試み，両教科書がどのように日本と日本人を表象しているのかをクリティカルに考察し，日本とアメリカのポストコロニアルな関係の再生産の仕組みを明らかにした。

先ず，両教科書が「京都」「すし」「歌舞伎」「たたみ」などを日本の伝統文化として「日本の文化」や「Culture Note」で取り上げるのみでなく，文法説明の例文，練習などにおいても繰り返し取り上げることにより，伝統文化の画一化が行われていることが明らかになった。また，添えられた写真が均質的なイメージを強める働きをし，『なかま』に至っては各章の冒頭にまで『伝統的』とされるものの写真を用いている。このような日本文化に触れるために「旅行」を題材として取り上げている課は登場人物が京都や長野，北海道を訪れお寺や神社，祭りに行くという設定になっている。

日本文化の画一化が見られるもう一つの側面は両教科書の沖縄の記述である。どちらも沖縄を美しい海，海岸，マリンスポーツと共に取り上げており，沖縄の負のイメージは無視されている。特に『げんき』では新宿を説明する箇所で戦後新宿で見られた戦争で障害を患った人々のことに触れているにもかかわらず，沖縄の問題には一切触れていない。同教科書は新宿とともに広島も同箇所で取り上げていることから，日本の戦争の記憶から沖縄を抹殺していると言え，これも画一化の作用の一つであると言えよう。

物質的伝統文化のみでなく，日本人の日常生活様式や話し方，価値観も画一化されており，それらのほとんどが戦後経済復興の中で叫ばれた「日本人論」と同じ日本文化，日本人の表象である。「謙虚さ」「遠慮」「グループ主義」などのコンセプトが日本文化，日本人の価値観として繰り返し挙げられ，ここでも日本人論が維持されていることが明らかになった。

そして，その日本人論が想定している他者がアメリカであることも明確に示した。主人公のアメリカからの女子留学生と共に日本語並びに日本文化を学習していく形式をとっており，例文や練習を見ても欧米の国々が用いられる場合が欧米以外の国よりも圧倒的に多いこと，留学生が見た日本というものも欧米からの留学生という設定が多いことがわかった。更に，両教科書が日米比較を用いた説明を「日本の文化」や「Culture Note」のみではなく，例文やロールプレイにも用いることにより，欧米というものが次第に「アメリカ」を中心としたものとして表象されることを明らかにし，アメリカ中心主義を再生産していることについても言及した。

これらの文化表象とそのシステムは様々な研究者が指摘しているポストコロニアル的関係を脱するどころか維持する働きを促しかねない。つまり，両教科書の文化表象はアメリカの視点から特徴付けられた日本文化であり，その再生産をアメリカを他者

に見据えて行うことは，ポストコロニアル言説の再生産であり，脱構築にはならない。日本文化，日本語を専攻にしなくても，必修外国語で，あるいは文化センターで日本語を学ぶ際にこのような日本文化の特徴を学ぶということは，沖縄などがある一定の表象から排除され，多様性を無視した均質的日本文化を学ぶという危険性がある。日本の高等教育機関で英語を教える私たちにもこのような危険性は付いて回る。英語圏の文化を説明する際に均質な日本文化と英語圏文化を対比させてはいないか。この問いを常に持ちながら教壇に立つべきであり，時には学生と画一的文化表象をクリティカルに考察する機会を設け，Altbach や Apple，Hickman と Porfilio が言及しているような教科書の政治性を明らかにしていく必要がある。言語を教えることと文化を教えることが相即不離の関係というのはそういうことなのではないか。

【付記】

本稿の執筆に当たっては，熊本学園大学付属海外事情研究所の 2014 年度研究助成を受けた。

参 考 資 料

Altbach, Philip G. “Textbooks: The International Dimension.” In Michael W. Apple and Linda K. Christian-Smith (eds). The Politics of the Textbook, New York: Routledge, 1991, 242-258.

Apple, Michael W. “The Culture and Commerce of the Textbook.” Michael W. Apple and Linda K. Christian-Smith (eds). The Politics of the Textbook, New York: Routledge, 1991, 22-40.

Apple, Michael W. and Linda K. Christian-Smith. “The Politics of the Textbook.” In Michael W. Apple and Linda K. Christian-Smith (eds). The Politics of the Textbook, New York: Routledge, 1991, 1-21.

Azimova, Nigora and Bill Johnston. “Invisibility and Ownership of Language: Problems of Representation in Russian Language Textbooks.” *The Modern Language Journal*, 96.3 (2012): 337-349.

Banno, Eri et al. GENKI I: An Integrated Course in Elementary Japanese. (2011).

———. GENKI II: An Integrated Course in Elementary Japanese. (2011).

Creighton, Millie. “Consuming Rural Japan: The Marketing of Tradition and Nostalgia in the Japanese Travel Industry.” *Ethnology* 36.3 (1997): 239-254.

Crozet, Chantal and Anthony J. Liddicoat. “Teaching Culture as an Integrated Part of Language: Implications for the Aims, Approaches and Pedagogies of Language Teaching.” In Chantal Crozet and Anthony J. Liddicoat (eds). Teaching Languages, Teaching Cultures, Melbourne: Language Australia, (2000), 1-18.

Durrani, Naureen. “Schooling the ‘Other’: The Representation of Gender and National Identities in Pakistani Curriculum Texts.” *Compare* 38.5 (2008): 595-610.

Foroutan, Yaghoob. “Gender Representation in School Textbooks in Iran: The Place of Languages.” *Current Sociology* 60.6 (2012): 771-787.

Gulliver, Trevor. “Banal Nationalism in ESL Textbooks.” *Canadian Journal of Education* 34.3 (2011): 119-135.

Harootunian, Harry, and Naoki Sakai. "Japan Studies and Cultural Studies." *positions* 7.2 (1999): 593-647.

Hatasa, Yukiko Abe, Kazumi Hatasa, and Seiichi Makino. Nakama 1: Japanese Communication Culture Context. New York: Houghton Miffin Company, 2010.

———. Nakama 1: Japanese Communication Culture Context. New York: Cengage Learning, 2014.

———. Nakama 2: Japanese Communication, Culture, Context. New York: Houghton Miffin Company, 2000.

———. Nakama 2: Japanese Communication, Culture, Context. New York: Cengage Learning, 2010.

Hickman, Heather and Brad J. Porfilio (eds). The New Politics of the Textbook. Boston: Sense Publishers, 2012.

Ivy, Marilyn. Discourses of the Vanishing: Modernity, Phantasm, Japan. Chicago: University of Chicago Press, 1995.

———. "Tradition and Difference in the Japanese Mass Media." *Public Culture* 1.1 (1988): 21-29.

Jones, Martha A., Catherine Kitetu, and Jane Sunderland. "Discourse Roles, Gender and Language Textbook Dialogues: Who Learns What from John and Sally?" *Gender and Education* 9.4 (1997): 469-490.

Khurshid, Khalid, Iram Gul Gillani, and Muhammad Aamir Hashmi. "A Study of the Representation of Female Image in the Textbooks of English and Urdu at Secondary School Level." *Pakistan Journal of Social Sciences* 30.2 (2010): 425-437.

Kubota, Ryuko. "Critical Teaching of Japanese Culture." *Japanese Language and Literature* 37.1 (2003): 67-87.

———. "Discursive Construction of the Images of U.S. Classrooms." *TESOL Quarterly* 35.1 (2001): 9-38.

Lee, Jackie F.K. and Peter Collins. "Australian English-Language Textbooks: The Gender Issues." *Gender and Education* 21.4 (2009): 353-370.

イ・ヨンスク『「国語」という思想：近代日本の言語認識』岩波書店 1996.

Lévi-Strauss, Claude. Structural Anthropology. New York: Basic Books, 2008.

Li, XiaoYan and Katsuhiro Umemoto. "Toward an Integrated Approach to Teaching Japanese Language and Culture: A Knowledge Perspective." *Intercultural Communication Studies* 19.2 (2010): 285-299.

Liddicoat, Anthony J. "The Ideology of Interculturality in Japanese Language-in-Education Policy." *Australian Review of Applied Linguistics* 30.2 (2011): 20.1-20.16.

馬淵仁『クリティーク多文化，異文化：文化の捉え方を超克する』東信堂，2010.

Matsumoto, Yoshiko and Shigeko Okamoto. "The Construction of the Japanese Language and Culture in Teaching Japanese as a Foreign Language." *Japanese Language and Literature* 37.1 (2003): 27-48.

McGee, Michael Calvin. "The 'Ideograph': A Link between Rhetoric and Ideology." *Quarterly Journal of Speech* 66.1 (1980): 1-16.

Noack, Rick. "Quiz: Which Foreign Language Should You Learn?" Washington Post (February 25, 2015). Accessed on April 15, 2015.
https://www.washingtonpost.com/news/worldviews/wp/2015/02/26/quiz-which-foreign-language-should-you-learn/

小熊英二『〈日本人〉の境界：沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮植民地支配から復帰運動まで』新曜社 1998.

Otsuji, Emi and Chihiro Kinoshita Thomson. “Promoting ‘Third Space’ Identities: A Case Study of the Teaching of Business Japanese.” *PORTAL Journal of Multidisciplinary International Studies* 6.1 (2009): 1-21.

Poulou, Sofia. “Sexism in the Discourse Roles of Textbook Dialogues.” *Language Learning Journal* 15.1 (1997): 68-73.

Ramirez, Arnulfo G. and Joan Kelly Hall. “Language and Culture in Secondary Level Spanish Textbooks.” *The Modern Language Journal* 74.1 (1990): 48-65.

Rifkin, Benjamin. “Gender Representation in Foreign Language Textbooks: A Case Study of Textbooks of Russian.” *The Modern Language Journal* 82.2 (1998): 217-236.

酒井直樹，ブレット・ド・バリー，伊豫谷登士翁 編著『ナショナリティの脱構築』柏書房 1996.

Shardakova, Marya and Aneta Pavlenko. “Identity Options in Russian Textbooks.” *Journal of Language, Identity, and Education* 3.1 (2004): 25-46.

Shoshan, Ofer. “The 6 Top Languages Global-Minded CEOs Should Know.” *Entrepreneur* (April 3, 2015). Accessed on May 1, 2015.
http://www.entrepreneur.com/article/244233

Shuck, Gail. “Racializing the Nonnative English Speaker.” *Journal of Language, Identity, and Education* 5.4 (2006): 259-276.

Siegal, Meryl and Shigeko Okamoto. “Toward Reconceptualizing the Teaching and Learning of Gendered Speech Styles in Japanese as a Foreign Language.” *Japanese Language and Literature* 37.1 (2003): 49-66.

Simpson, Colin. “Culture and Foreign Language Teaching.” *Language Learning Journal* 15.1 (1997): 40-43.

Sunderland, Jane, Fauziah Abdul Rahim, Christina Leontzakou, and Julie Shattuck. “From Bias ‘In the Text’ to ‘Teacher Talk Around the Text’ : An Exploration of Teacher Discourse and Gendered Foreign Language Textbook Texts.” *Linguistics and Education*, 11.3 (2001): 251-286.

鈴木貴美子.「日本語教育における「日本文化」についての理論的・実践的考察：クリティカルペダゴジーの視点から」『ICU 日本語教育研究』3 (2006): 81-91.

Tai, Eika. “Kokugo and Colonial Education in Taiwan.” *positions* 7.2 (1999): 503-540.

———. “Rethinking Culture, National Culture, and Japanese Culture.” *Japanese Language and Literature* 37.1 (2003): 1-26.

Yang, Chi Cheung Ruby. “Gender Representation in a Hong Kong Primary English Textbook Series: The Relationship between Language Planning and Social Policy.” *Current Issues in Language Planning* 12.1 (2011): 77-88.

吉野耕作,『文化ナショナリズムの社会学：現代日本のアイデンティティの行方』名古屋大学出版会，1997.

Yuen, Ka-Ming. “The Representation of Foreign Cultures in English Textbooks.” *ELT Journal* 65.4 (2011): 458-466.

This Is a Textbook and It's Political: Construction of Japanese Culture and Reproduction of the Western Idea of Japan in Japanese Language Textbooks

Aya MATSUSHIMA

There are many studies that analyze language textbooks. Some analyze the effectiveness of classroom instruction by employing cultural elements of a given country, and others analyze politics of gender or class representations in textbooks However, there is little research that scrutinizes the ways in which a textbook mirrors an external view of a particular nation. This paper attends to two Japanese language textbooks widely used in the first two years of language programs in American colleges, *Genki* and *Nakama*, and analyzes the ways in which the textbooks construct a particular understanding of Japan. The paper also argues that the representations conform to the Western Orientalist idea of Japan, which ultimately reproduces a hegemonic relationship between Japan and the United States.